

クリークを主体とした景観に対する意識構成に関する考察
A Study on the Formation of Consciousness to the Landscape in the Creek Region

○富田 景子^{*}，木佐貫 順子^{*}，平井 康丸^{**}，森 健^{**}
TOMITA Keiko, KISANUKI Yoriko, HIRAI Yasumru, MORI Ken

1. 緒言

近年、環境問題への関心の高まりや価値観の変化とともに、農業が持つ多面的機能に注目が集まっている。なかでも、2004年の景観法の制定をきっかけに地域活性化を目的とした農村景観の保全活動は全国的に広がっている。しかし、この数十年の間に農業および農業を取り巻く環境は大きく変貌し、さらに、自然環境保護の観点から農村地帯でも環境配慮が求められるなど、農村景観を取り巻く状況は変化し続けている。このような変化の中で、人びとが景観に求めるものは何か、後世に残すべき景観とはどのようなものかを明らかにすることは、今後の景観形成を考える上で重要である。

そこで本研究では、景観に対する意識構成を明らかにすることを目的とし、その第一歩として景観に対する意識調査を実施した。調査対象の景観はクリーク地帯とした。クリークは、平野部での水不足解消のために築かれた特徴的な水利システムであり、対象とした筑後川下流域のクリークでは、農業用水、防火用水として取水されるほか、農地や家庭からの排水施設として利用されるなど、現在も地域住民の生活に密着したものである。よって、地域住民を対象とした意識調査から、景観に対する意識を構成する要素について明らかにすることを目的とした。

2. 方法

景観に対する意識調査の方法として、感性工学の手法を採用した。調査方法は、調査対象とするクリーク地帯の画像を被験者に見せ、画像の表現としてどの形容詞（以下、感性ワード）がふさわしいかを選択させるものである。画像は、植物からなる自然護岸、コンクリートで造成された人工護岸、木で作られた木柵護岸の3パターンとし、護岸以外の要素はすべて同じである。感性ワードは、福岡県が1999年から2003年にかけて実施した地域住民に対する意識調査結果を用いてテキストマイニングを行い、20組のワードを設定した。また、SD尺度の段階は、福田（2004）にならい、7段階「非常に」「かなり」「やや」「どちらでもない」「やや」「かなり」「非常に」を採用した。

調査は、2007年10月から12月にかけて、福岡県みやま市、大川市、大木町、筑後市、柳川市の住民を対象に実施した。質問内容は、年齢、性別、居住地区、農業従事の有無、クリークの管理や環境に対する意識等の個人に関する質問および景観の評価についての質問とした。被験者の詳細を表1に示す。

*九州大学大学院生物資源環境科学府 *Graduate School of Bioresource and Bioenvironmental Sciences, Kyushu University*

**九州大学大学院農学研究院 *Faculty of Agriculture, Kyushu University*

キーワード：クリーク，農地景観，意識調査

Table.1 被験者の詳細 Details of the examinees

市町	人数	性別		営農		年代				
		男性	女性	農家	非農家	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上
みやま市	27	26	1	17	10	1	0	7	7	12
大川市	25	22	3	20	5	1	2	3	4	15
大木町	18	16	2	12	6	0	0	3	7	8
筑後市	26	24	2	16	10	0	1	3	7	15
柳川市	12	0	12	0	12	0	0	0	2	10
計	108	88	20	65	43	2	3	16	27	60

3. 結果および考察

農地周辺の景観に対する評価を図1に示す。数値は、感性ワードに対するSD尺度を「どちらでもない」を4として数値化したもので、全被験者の平均値である。自然護岸に対しては「昔ながら」「生物がいそうな」「自然な」、人工護岸に対しては「整備された」「維持しやすい」「人工的な」「耐久性がある」といった評価が得られたが、木柵護岸に対しては、どちらでもない評価が多かった。また、自然護岸と人工護岸の評価は対照的な評価が多く、クリークの護岸によって評価が異なることが分かった。

農地周辺の自然護岸のクリークに対する5市町の評価について分散分析を行った結果、「環境にやさしい」に対する評価で、有意水準5%で差が見られた。柳川市と大木町の住民は「環境にやさしい」と評価したが、筑後市の住民は「どちらでもない」と評価した。このような違いが生じた理由として、今回調査を実施した5市町の中でも、クリーク整備の状態やまちとしての取り組み、住民の意識にも違いがあるためと考えられる。

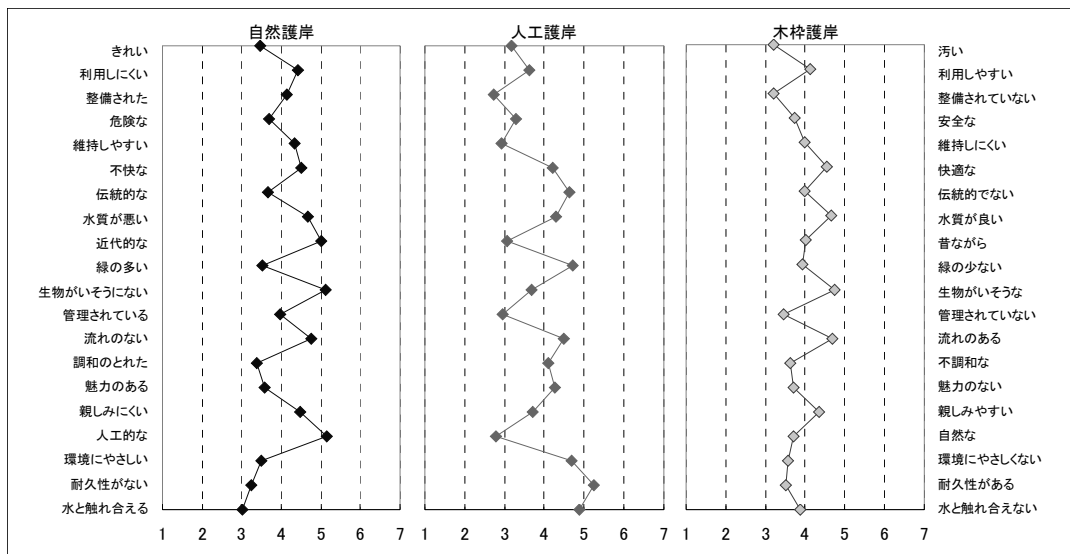


Fig.1 農地周辺の景観に対する評価 Evaluation of inhabitant to agricultural landscape

4. まとめ

- ・クリークの護岸によって、景観に対する評価は異なった。
- ・景観に対する評価は、市町によって違いが生じた。

<参考文献>

福田忠彦研究室 2004 人間工学ガイド。サイエンティスト社，東京